タ　イ

平成9年1月13日～1月22日

社団法人 国際交流サービス協会

Ⅰ. 調査目的

1. 調査目的

- タイの青年招へい事業に対する評価を関係機関より聴取し、今後の招へい事業改善に役立てる。
- タイの一般事情を視察し、よりスムーズな受け入れ、プログラム改善に寄与する。
- 帰国青年との再交流および同窓会との意見交換を通じ、友情を広め、さらに永続させる糸口を模索する。
- 帰国青年の職場視察を通じ、日本における研修成果の確認を行う。

2. 調査内容

(1) 国際協力事業団（Japan International Cooperation Agency：ＪＩＣＡ）タイ事務所訪問
- 青年招へい事業を含むＪＩＣＡの活動状況

(2) 在タイ日本大使館表敬訪問
- タイの一般事情

(3) 国立青年局（National Youth Bureau：ＮＹＢ）訪問
- 青年招へい事業運営状況
- プログラム内容等に関する意見交換ならびに要望事項

(4) 同窓会との懇談
- 活動内容及び状況
- 青年招へい事業に対する意見交換と要望事項

(5) 帰国青年活動現場訪問
- 日本における研修成果、滞日体験の成果の確認

(6) ドゥアン・プラティープ財団（Duang Prateep Foundation）訪問
- タイの急激な産業開発及び人口の都市集中により深刻な社会問題となったスラムの視察と今後の対策

(7) ホームステイ
- 一般家庭生活を通じ、タイ国民の生活状況を視察
- ホームステイの考察

3. 調査団員

	氏名	所属先	青年招へい事業との関わり
リーダー	加藤 彩子	社団法人国際交流サービス協会	分野別都内プログラム担当者
メンバー	大谷内 守	財団法人金沢国際交流財団	分野別地方プログラム担当者
メンバー	池見 直子	東日本旅客鉄道株式会社	分野別都内プログラム 合宿セミナー参加者
メンバー	大内 久美	海外経済協力基金	分野別都内プログラム 合宿セミナー参加者
メンバー	高村 裕	中央大学大学院生	分野別都内プログラム 合宿セミナー参加者

Ⅱ. 調査結果

1. 日　程

1月13日（火）
- 11：00　成田空港発（JL717便）
- 15：55　バンコクドンムアン空港着
- 17：30　デルタグランドパシフィックホテル　チェックイン

1月14日（水）
- 09：30　ホテル出発
- 10：00　ＪＩＣＡタイ事務所訪問
- 11：20　在タイ日本大使館表敬訪問
- 12：30　昼食
- 14：00　国立青年局訪問（～15：30）
- 18：30　ＪＩＣＡ主催夕食会
- 22：30　ホテル帰着

1月15日（水）
- 09：30　ホテル出発
- 10：00　帰国青年の活動現場訪問（Thai Dramatics School）
- 12：00　昼食
- 14：00　帰国青年の活動現場訪問（Karn Keha Tha-Sai School）
- 17：50　ホテル帰着

1月16日（木）
- 07：30 ホテル出発

10：00　帰国青年職場訪問（Sirindhorn Institute 農業訓練農場）
12：00　昼食
14：00　受講者宿泊施設ならびに果物農園見学（Sirindhorn Institute）
17：00　ホテル帰着

1月17日（金）
10：00　ブルーウエーブホテルへ移動
11：00　ホストファミリーと対面

1月18日（土）
終日　　ホームステイ

1月19日（日）
終日　　ホームステイ
夕方　　ブルーウエーブホテル チェックイン

1月20日（月）
07：00　ホテル出発
08：00　同窓会会長宅にて朝食会
12：00　帰国青年職場（果物農場）訪問
17：30　ホテル帰着

1月21日（火）
09：45　ホテル出発
10：30　ドゥアン・プラティープ財団訪問
18：30　調査チーム主催歓送会（デルタグランドパシッフィックホテル）

1月22日（水）
07：30　ホテル出発
11：10　バンコクドンムアン空港発（TG640便）
19：00　成田空港着

2. 主要面談者

(1)　ＪＩＣＡタイ事務所
後藤 幸一 次長
斎藤 祐巳 次長
小川 登志夫 所員

(2) 在タイ日本大使館
木暮 康二 一等書記官

(3) 国立青年局（ＮＹＢ）
Secretary-General Ms. Uraiwan Pichitakul
Youth Coordination Division Director Ms. Maliwan Kullavanijaya
Ms. Usanee Kangwanjit
Ms. Wiparat Morida

(4) 同窓会
President Mr. Decha Sigvanich
Manager Ms. Muukda Jenthanyawan

(5) 帰国青年活動現場
Thai Dramatic School（タイ芸術学校）Director Ms. Reyadee Sayakom
Karn Keha Tha-Sai School（小中学校）President Ms. Peamchit Kiefbunrue
Teacher Ms. Valaiporn Smoolprai
Teacher Mr. Witsanu Memungtham
（平成７年度教育）
Sirindhorn Institute（農業訓練農場）Director Mr. Pakorn Tongkerd
Mr. Sunit Choojai
New Orchid Plants, Orchid Flowers Good's Chairman
Mr. Chatchawan Kaetkaew

(6) ドゥアン・プラティープ財団
Ms. Radapan

3. 調査結果概要

(1) 青年招へい事業に対する評価

当事業に対する評価は全体的によいという印象を受けた。帰国青年より、とても有意義な経験をしたとの評価を受け、ＮＹＢを中心とした各関係機関からも、今後も是非本事業を続けてほしいとの強い要望がだされた。青年は日本に滞在して様々な経験をしている訳だが、今後の問題として、経験したことをどのように活かし、広めていくかにあると思われる。この点に関しては末項の問題点として挙げる。

(2) タイ国、タイ人

短い滞在ではあったが、タイの一般事情、タイ人の気質、食べ物の嗜好等、つかむことができた気がする。まだ端緒の感もあるが、今後のプログラム改善に役立てられたらと思っている。今回あらためて認識したことだが、タイ人は時間に対する概念が日本人と異な

りとてもゆっくりしているということである。彼らに日本人のようなハードスケジュールは難しく、過去のプログラムで青年をかなり縛っていたかもしれないと反省した。今回、タイ人のプライドの高さを感じさせる場面が多々あった。また、アフターケアー調査チームに自分自身が参加することで、プログラム中で不安を感じる点、疲労がたまりやすい箇所、食事の内容等のよし悪しが分かった。これからのプログラム作りによりきめの細かい対応ができることと思う。

(3) 帰国青年との意見交換

同窓会も含めて帰国青年の話を聴く機会があったが、様々な印象を受けて帰国した青年の話を直接聴取できたのは非常に貴重であった。彼らは帰国後、日本に大いに関心を持ちその経験を活かしている人と、面白かったという印象のみ持って帰国する人、または自分がなぜ招へい青年に選ばれたのかすら分からない人、２つに大別されるとの印象を強く受けた。人数多くなれば、後者が出るのはいたしかたないと思うが、今後本事業を継続するにあたって、前者をもっと増やしていけるよう意識して臨む必要性を強く感じる。

(4) 帰国青年と日本側関係者との交流

帰国後も日本青年との交流を続けているかどうかはまちまちで、強制できない故の難しさを感じた。国際友情を発展させていくためには、継続的なコンタクトが必要であり、距離が離れているがための難しさを改めて感じた。

帰国青年が私たちに本当によくしてくれるので、その理由を聞いたところ、自分が日本でよくしてもらったので日本人が来たらよくしようと思っていたと言うのである。本人同士のやりとりが続かなくとも、このように連鎖して広めていくというやり方もあるのだと認識させられた。

4. 現地調査・活動内容結果

(1) 表敬・訪問先における意見交換や聴取内容

イ．ＪＩＣＡタイ事務所

［報告内容］

- 平成８年度における弊協会での青年招へい事業受け入れ状況。
- タイは英語力に難があり、他の ASEAN 諸国との交流、日本青年との交流に多少戸惑う傾向がある等。

［その後の夕食会での意見交換］

- ＪＩＣＡタイ事務所で行っている事業
- 青年招へい事業との関わり、お互い青年招へい事業を今後も継続させたいという共通の認識を持ちつつも、果たして、このまま日本が全額を負担し続けて本事業を続けてよいか、経費を日タイで折半すればタイ側もより意欲的になるのではないか、青年招へい事業を単なる援助と考えるのではなく、幅広く国際交流に貢献する事業として捉え、広く日タイ両国から支持を受ける必要がある等の意見をいただいた。
- 合宿セミナーを含めた本事業の広範な宣伝方法についてタイ国内で積極的に宣伝し

ていくことに賛成し、私たちプログラム担当者、合宿セミナー参加者の協力も求められた。

ロ．在タイ日本大使館

木暮 一等書記官よりタイの現状について、主に次の説明を受けた。

- タイの経済状態が好調なようで実は悪化していること。農産物を中心として輸出が落ち込んでいるうえ、高度な産業技術が思ったほど発展していない等がその原因として挙げられる。
- タイで今大きな問題となっているのは環境とエイズ。埃が多く大気汚染が都市部でかなりひどくなっているが、地方ではまだそれほどでもない。多少マスコミの誇張もあるが、エイズ、売春が問題として取り上げられるのは、それなりの調査を政府が行っているということであり、他国に比べて進んでいるといえる。
- タイは学歴社会であり、高学歴者はとても優遇される。経済格差が激しく、富める者はより富み、それも一つの社会問題となっている。

ハ．国立青年局（ＮＹＢ）

意見交換の内容は次のとおり。

①ＮＹＢからの改善要望

- 講義の質疑応答の時間を長く。
- 合宿時のディスカションのテーマを事前に知りたい。
- 最終日程をできるだけ早くほしい。
- 青年招へい事業の評価、当事業の支持は高く、特にホームステイと合宿セミナーが好評とのことで今後も続けていく必要があるとの意見が出されたが、その理由は聞くことができなかった。

②青年の選考基準

- ＪＩＣＡで定められた規定に該当するか、否かを重要視しているとのこと。調査チーム側からは、意欲的で、国際交流に貢献できそうな青年を今後も選出してもらえるよう要望した。
- ＮＹＢが日本に行く青年に何を期待しているか、帰国後どのように活動してほしいのか質問したが、見聞を広めてほしい等の一般的抽象的な回答しか得られなかった。

ＮＹＢは青年の帰国後評価会を開き、翌年への反省材料としているが、今後もうまく機能していくことを望む。

最後に同窓会との関係を質問したが、ＮＹＢと同窓会の有機的連係は感じとれず、直接同窓会に質問することとした。

ニ．同窓会

同窓会会長の自宅にて朝食会の歓迎を受けた。当初、同窓会のメンバーが15人位集まると聞いていたが、結局、仕事の都合上会長およびマネージャーの２人しか集まれなかった。幅広く意見を聴けるよい機会かと期待していたため、とても残念であった。同窓会のメンバーとはいえ、普段仕事を持っている人たちなので現実にはそう簡単には集合できず、同窓会会長が会長たる所以は、彼が実業家であってかなり時間的に余裕があるからであろう。

［活動内容］

幹部ミーティングは１カ月に１回、定期的に行っている。さらに１年に１回、同窓会メンバーで集まる会合が開かれている。

- 活動の問題点
- 国が広いため集まりが悪く、50 バーツの会費を取るのも容易ではない。同窓会でオフィスを持っていないため活動が活発にできない。ＮＹＢにオフィスを借りたい旨申し出ているが未だ実現しない。
- 招へい青年の質の低下

招へい人数が多く、数をこなすのが精いっぱいであり、ＮＹＢはこの事業を他の事業と並行して行っているため、目が行き届かない等が原因として挙げられる。今後この事業を日タイで協力して続けていくためにはどうしたらよいか活発な意見交換を行った。日本側としては同窓会のより活発な活動を期待し、よりよい青年招へい事業を作り上げていくよう協力を求めた。時には、ＮＹＢ、政府への働きかけも同窓会が積極的にできないだろうか等の意見を述べた。同窓会として努力はしているもののなかなかうまくいかない現状を伝えられ、やはり同窓会のあり方、組織として活動するためにはもう少しきちんとしたバックアップが必要だと痛感した。

(2) 帰国青年活動状況

イ．訪問先：Thai Dramatic School

帰国青年には直接会えなかったが、校長から学校の活動内容の説明を受ける。通常のカリキュラム外にタイの伝統音楽、舞踊を選択する。生徒のほとんどは将来伝統音楽または舞踊を志す人たちだ。競争率の高い、かなりの難関校である。

訪問時は、ちょうど舞踊、音楽の教科を行っておりその練習ぶりを見学することができた。日本の招待でタイ舞踊を日本に披露する機会も過去にあったとのこと。タイのように伝統文化を存続させ、世界にも広める機会をこのような形で持ち続けている学校は日本にはなく、日本が学ばなければいけない点だと感じた。

ロ．訪問先：Karn Keha Tha-Sai School

タイの一般的な学校で、小・中学校が併設されている。タイの教育制度に関するブリーフィング、Karn Keha Tha-Sai School のカリキュラム及び特徴の説明を受け、授業参観した。

タイの教育制度は日本と同じく 6・3・3・4 で、はじめの６年間が義務教育だが、日本の中学校にあたる次の３年間も 1997 年より義務教育となるそうだ。

本校は、将来の中学校の義務教育化に向けて、９年の教育をいち早く行っている上、小学１年時より英語教育を行うなど進んでいた。日本の中学校にあたる３年間では、職業訓練コースとして、タイピング、散髪、裁縫、木工、舞踊、コンピューターの中から１つ選択できるカリキュラムがあり、日本の教育と違い選択科目を多く設け、生徒の個性を尊重しているように思われた。特に印象深かったのは、選択科目の一つである床屋の授業。13 歳そこそこの幼い少年少女がお互いの髪を切る。生徒の多くは美容師を目指して頑張っているそうだ。

本校の教師である帰国青年からも話を聞くことができた。帰国後日本での体験を生徒に

発表する場を設ける等、生徒に積極的に日本文化、日本語を教えており、日本に対する見聞を大いに広めている姿に感心した。生徒たちもこの日の私たちの来校のため、日本語の挨拶を勉強したり、踊りを披露したり大いに刺激になったことと思う。

ハ．訪問先：Sirindhorn Institute

バンコクの郊外、北に車で２時間半あまりの所にこの施設は位置する。農業訓練施設を併設した農場と聞いていたが、農業教育も含めた幅広い生涯教育(Non Formal Education)を手がけている施設であり、タイも通常の教育以外にもこういった教育に力を入れる余力ができてきたことを知るよい機会となった。初めに校長よりこの施設の概要説明を受け、施設を案内してもらった。

教育省の生涯教育部の管轄であるこの施設は、政府とＮＧＯが協力し合ってできたタイ国内最初の施設であり、成人のための生涯教育を目的としている。より上のキャリアを積むために数々の職業訓練コースを設け、さらには各分野におけるより高度な技術を習得するためのコースも設置している。かかる機会をタイ国民に提供することにより、彼らがより充実した人生を送れるようサポートしている。コースは無料、もしくは負担にならない程度の受講料にて受講できるようになっている。

カリキュラム編成を担当する帰国青年にも直接話を聞くことができ、職場での活躍ぶりに目を見張った。よりよいカリキュラムが組めるようアンケートをとるなどの工夫をし、常に市民のニーズにあったものを提供しているそうだ。好奇心がとても旺盛で、帰国後も日本に大いに関心を持ち続け、日本語を学ぶに至っているという。

そのあと、帰国青年の案内で、上記コース受講者が宿泊する施設ならびに果物農園を訪れた。宿泊施設はミーティングルーム等を備えておりとても研修に適した環境であった。見学した農園のオーナーは農業の分野でかなり成功した人物で、施設の提供する研修コースの講師をやっているとのこと。実践に基づいた話が聞けるコースを作るため、実際その仕事に携わっている人たちを講師に招いているという例が分かってよかった。

ニ．訪問先：New Orchid Plants，Orchid Flowers Good's

ラン園を経営する帰国青年と、果物農園を弟と２人で経営する帰国青年を訪問した。

彼自身農業専門学校を卒業し、今や２ヘクタールの土地を管理するに至る。年間３トンの収穫、機械はなく、収穫時には近所の人々が助け合って収穫するという。

日本語が堪能なラン園経営の帰国青年によると、帰国後、実際日本で経験したことを活かしている人は、彼も含めほんのひとにぎりであろうということ。実際、この帰国青年は、日本での体験は特に日常生活で役立っているわけでもなく、面白かったという程度であった。環境の違うタイで、日本で体験したことを日常生活、仕事に生かすのは期待しすぎかとは思うが、少し寂しさを感じた。

(3) ホームステイ

氏名	ホスト氏名	ホスト職業・参加年度・家族構成
加藤 彩子	Witsanu Memungtham	教員　平成７年度　父・母・弟・妹
大谷内 守	Pol.Lt. Adisak Orachorn	警官　平成８年度　叔父
池見 直子	Phanit Manokarn	公務員　平成８年度　夫・弟
大内 久美	Somsri Sukumpantanasan	ＪＩＣＡ職員　平成８年度　義父母・夫・義弟２人
高村 裕	Sunit Choojai	公務員　平成７年度

(4) その他

イ．ドゥアン・プラティープ財団

現在タイで問題になっている急激な都市化の結果、取り残された人々のスラム生活について、その実情と今後の対策のブリーフィングを受けた。

プラティープ財団はバンコク市内、全国でも最大規模のクロントイスラムの中に所在している。職員の80パーセントは女性で、スラム出身者が多い。説明をしてくれたのは、日本語の堪能な女性と日本からボランティアで活躍している女性で、彼女の逞しさに一同驚いてしまった。財団はスラムの子供たちを救うための活動を第一と考えており、里親制度を設けている。里親が年間いくらかの金額を支払い、子供の学費の面倒をみるのである。現在スラムには約10万人が住んでいると言われており、そのうちの40パーセントが子供だそうだ。プラティープ財団の事務長、プラティープさん自身、スラムの出身者であり、富める者と貧しい者のあまりの違いや不公平を嘆き、この活動を始めるに至ったそうである。その活動が評価され、18周年にあたる年にアジアのノーベル賞といわれるフィリピンのラモン・マグサイサイ賞を受賞し、それを資本にこの財団を設立したのである。

タイのスラム問題の難しさは、物質的援助で解決できる“飢え”にあるのではなく、麻薬、賭博、喧嘩、非行等の問題が複雑にからみ、解決がとても困難な点である。最近は麻薬問題が特に深刻で、スラム内の子供の約３割（約１万２千人）が麻薬中毒に侵されているという。さらには、立ち退きを理由にした嫌がらせの放火が相次ぎ、火事が絶えないそうである。

プラティープさんは、個人でスラムの貧困問題を解決することに限界を感じており、政府にもっとこの問題を深刻に受けとめ、対処すべきだと呼びかけているが、政府は相変わらず、国家の経済発展に力を注ぐばかりで事態の改善にはまだ先のことであるとの印象を強く受けた。

プラティープさん、およびそのスタッフの方も常にスラムの現状を把握するためスラム内に住んでいるということに実に驚くとともに、そこまで真剣に取り組まなければ解決の糸口がつかめない深刻なスラムの問題に愕然とした。

最後にスラム内の見学もさせてもらったが、下水が完備していないため、淀んだ水が異様な臭いを放ち、ゴミの収集もなく山積みしたゴミ置き場とともに、ひしめき合った小さな汚い家々に住む人々を目の当たりにして言葉もなくなってしまった。

5. 所感及び提言

(1) 調査団所感

アフターケアーを終わって帰国してみると、タイを訪れたのは本当に短い期間であり、タイのさわりを学ぶことも精いっぱいであったと痛感する。

最後の晩の歓送会時に、同窓会の元会長が、イサーンという地域の本を団員に贈呈しながら言っていた言葉が妙に心に残った。今回このチームがタイに来て、バンコクもしくは周辺の発達した都市しか目にする機会がなかっただろうが、タイにはイサーンというほとんど忘れ去られた地方があり、そういった地方も含めてすべてがタイなのだということを分かっておいてほしいと彼は言った。

短い滞在の間に、限られた情報から全体像をつかみ、結論づけるのは到底無理だとは思うが、団員一人一人が問題になっている点、改善したほうがよい点をおぼろげでありながら掴んだのではないかと感じている。

また、今回メンバーのうちの何名かは私費参加をした。彼らの本事業に対する熱意と意欲を大切にし、彼らのアフターケアー参加を無駄に終わらせてはならないと思う。

(2) 団員所感

イ．「アフターケアー調査の意義」　　加藤 彩子

今回機会あってこういったプログラムに参加させていただき、大変有意義な時間を過ごすことができた。分野別都内プログラム担当者として、帰国青年の活躍ぶりを見学したり、青年の祖国を視察したりするとなお一層このプログラムに対する意欲がわくというものである。訪タイは、よりよいプログラム作りに多いに役立ったし、他のプログラム作成にもかなり参考になったと思う。

他のメンバーは、一人一人立場が違うし、各々感じたこと、ためになったことは各自の所感を参考にしていただくとして、ここではアフターケアー調査の意義について考えてみたい。

帰国青年の祖国を訪問し、関連機関が青年をどう派遣しているのか、青年招へい事業にどう関わっているのか、帰国青年がどういう暮らしをしているのか、その様子を眼で見て確かめるということにおいて、百聞は一見にしかずという諺どおり、アフターケアー調査の意味は大きい。誠によい機会を与えられていると思う。しかし、実際何をどう調査するかを考えてみると、期間がきわめて短いと感じた。おぼろげながらではあるが、今後の問題点、改善点を掴むきっかけには十分になると思うが、それを掘り下げて様々な観点からの意見を聴いたり、調査する時間が足りない。かといって10日間以上日本をあけられない諸々の理由が団員にはあるだろうし、妥協点がこの辺であるのかと思われた。

アフターケアーの一つの重要な目的に、帰国青年の職場視察を通じ、日本における研修成果を確認するというものがある。この目的を徹底させるためには、自分の企画した、もしくは参加したグループの国を訪れるのが最も効果的であると思われる。そうすることによって、自分が企画したプログラムがどれだけ効果的であったか計れるし、合宿セミナー参加者、ホストファミリーにとっては、より一層の友情を深める願ってもいないチャンスとなるからである。今回ASEAN混成の4名のみしか接点のなかったアフターケアーを誠

に残念に思うが、半面お互い知らない同士という立場から、かえって遠慮せず本音で話ができたかもしれないと感じた。

アフターケアーチームにできることは、この青年招へい事業のごく一部に限られているし、果たしてそれが今後のためになっているのかどうか不安に思うが、その限られた時間の中でも、最大限チャンスを生かさなければならないように思う。より効果的に時間を使うために、調査事項を１つ、ないしは２つに絞り集中的に調査したほうがよかったかもしれないと感じた。たとえば青年との交流なら交流だけに、国事情の視察なら視察だけに、といった方法はどうだろうか。毎年訪タイしているわけだから、一年、一年積み重ねて情報を増やしていくとより効果的かもしれない。その年の訪問がそれで終わってしまうのもいかがかと思う。１年たって、以前に収集した情報が古くなり、また新しく同じことを調べなければならなくなるかもしれないが、それはそれでよいのではないだろうか。

ロ、「たとえ住居は狭くとも･･･」　　大谷内 守

地方協力団体からこのたびの「青年招へい事業」アフターケアー調査に参加し、受け入れる側ではなく、受け入れられる側から見た現地日程、プログラム運営、そしてホームステイについて述べてみたい。

まず、当日の急な変更はやむをえないが、訪問先や相手についての情報は、前もって正確なものがより多くあったほうがよい。こちらのイメージと違っていたり（最初の農場視察の組織について知らされていた内容がまちがっていた、事前の調査が不十分）、その場で対処できない場合（予想以上に向こうの人が多かったり、逆に少なかったり、これも現地スタッフとの打ち合わせ不足による）があった。受け入れる側は、事前に日程の打ち合わせ、訪問先の下見をしておいてほしい。

公式日程での訪問先の選出については、代表者を含んだ表敬訪問より、事務レベルのスタッフや青年など、この事業に携わっている人々との話し合いや交流が望ましい。現地の人々との交流の設定も、日程の先にもってくれば、その後お互いの都合にあわせて行動したり、自由な時間に個人的により親しくなれる。日程の一部でも、随行ボランティアのような帰国青年（スニットさんのような）の活用が望ましい。移動中に意外と本音や裏話が聞ける。

さて、今回初めてこのようなプログラムでホームステイを体験したが、自分とホストとの関係が個人的なつながりではなく、第三者のアレンジによるものだけに、心理的にかなり疲れた。招へい青年がホストファミリーについて事前に知りたがる理由がよく分かった。お互いについて前もって情報が交換できていれば良かったと思う（ちなみに金沢では、団の来沢時に各ホストファミリーからの写真と歓迎の手紙を渡したり、対面式前に非公式で交流会を企画し、お互いの趣味や嗜好について最終確認をしたが、これらは大変効果的であった）。私の場合、当日迎えに来た人がタイ語しか話せなかったが、その場で現地コーディネーターが、ホームステイで何をしたいか、またホスト側はどういう計画を立てているかを通訳してくれたので、ずいぶん助かった。

実際に体験したホームステイでは、市内観光を特に希望せず、できるだけ帰国青年や家族の日常に付き合うつもりで２泊３日を過ごした。住居は、市内ルンピニ公園の近くで、最寄りのバス停から屋台街（スラム街に近い）を通り抜けたところにあり、外観は日本の団地のような２ＬＤＫ。これは、彼自身がタイ南部の地方出身者で、大学からバンコクに

出てきているためだが、これまでの私のタイの友人がすべて一戸建てに住み、他にゲストハウスや郊外にコンドミニアムを持っている者も多かったので、まさに一般庶民の生活が体験できたと思う。

住居は、同じ団地内でも各家庭の防犯意識によって異なるが、普通玄関のドアは二重三重にロックされ、窓には鉄格子がはまっていた。床はすべてタイル貼りで、風呂はなくシャワーは水のみで、なぜかガスレンジ、流しはベランダにあった。部屋の天井にはいつも扇風機が回っていて、夜寝る時には寝室にクーラーをきかせてくれた（タイでは一般的に冷房が相手に対するサービスとされる）。ちなみに寝室は中２階で、天井まで１メートルほどの高さのいわゆる屋根裏部屋であった。

ホスト家族は帰国青年のアディサ（平成８年度 ASEAN 混成での招へい）と彼のおじさんで、食事は基本的に外の屋台でとり、帰りにおやつの果物や飲物を買ってきた。家のテレビでは、衛星放送でＮＨＫが放映されていた。また朝、３人で外出した時、お坊さんの托鉢に会うと、「タンブン」といって近くの屋台で喜捨セット（お米、水、お花等）を買って捧げたり（しばらくお坊さんの前にしゃがんでから捧げる）、通りでお釈迦様が祭られているほこらがあると、必ず「ワイ（合掌）」をしたり、有名な所ではお線香とお花を買っていっしょにお参りをした。その間、彼は、簡単な日本語をまじえて解説してくれたり、いつも日常会話集を持ち歩いていたが、なぜか日本での思い出についてはあまり語ってくれなかった。

このように彼らの普段の生活にこちらが合わせるかたちでお世話になったつもりだが、気付いてみると、家に居座っている私のところへよく近所の人が尋ねてきたり（結局、ニコニコして横に座っているだけなのだが）、食事で行きつけの屋台のおばさんと身振り手振りで話したりする中で、タイの下町の人々のやさしさや普段着のもてなしに触れたことが思い出される。裏を返せば、彼ら自身が自然に私を受け入れてくれていたからだと思う。それぞれの住まいは狭くても、長屋のようにつながった家々全体がひとつの家族であり、言葉の通じない私という外国人を笑顔で受け入れてくれた懐の深さは、「たとえ住居は狭くても、寛大なる人間であれ」というタイの諺どおりであったと思う。そして、これはよく日本で「ホームステイ？　うちは狭くてねえ」という声に対しても意味深いのではないだろうか。

最後に、この滞在を通じて特に強く感じたことは、タイが日本と同じように長い歴史と伝統を持つ国であるため、人々の自国に対する誇りが高く、なかなか彼らの本心が見えてこない（微笑みの裏が読めない）点である。よって、青年招へいの形でも、ASEAN 混成のような他の招へい国の青年の中では、言葉の問題もあって孤立したり、時間に対する感覚から（あの交通渋滞では仕方がない？）日本での集団の分刻みの行動にはなじまないのではないかと思う。今後は、彼らに限らず、随行中多少のことは目をつむって「マイペンライ（大丈夫！気にしなくていいよ）」と言って受け止められる担当でありたい。

ハ．「微笑みの国タイで見た青年たちの素顔」　　池見 直子

ASEAN 混成行政Ｂグループの合宿セミナーで、タイの青年たちはなぜか印象的であった。言葉の壁のせいか、他の ASEAN 諸国に比べると消極的で、ディスカッションでの意見交換に苦労している様子であった。恥ずかしがり屋で、控えめで、皆の輪の中になかなか入れないようであったが、時折見せる微笑には心惹かれるものがあった。そのため、こ

の合宿セミナーを契機に、タイへの好奇心が高まっていたところ、幸運にもアフターケアー調査チームの一員として、タイを訪れる機会を得た。ホームステイや帰国青年との交流を通じて体感したタイの国民性・価値観・文化や、今後の青年招へい事業のあり方について述べたい。

ホームステイは初めての経験であり、期待で胸を膨らませていた。出発前にホストファミリーの情報はなく、到着2日目にようやくデータをもらった。私のホストファミリーはパオさんで、ASEAN混成環境グループの一員として、11月に日本を訪れたばかりであった。彼女は土木技師の夫と義理の弟と3人暮らし。日本人を受け入れると知って、ASEAN混成グループの仲間であったギフトさん（はるばるチェンマイから駆けつけてくれた）とソンさんを加え、ホームステイは始まった。アフターケアー調査チームとして訪タイしたにもかかわらず、公式プログラムの中に、ASEAN混成行政Bグループのメンバー4名との再会は設定されていなかったが、パオさんの計らいで、バンコク在住の2名に会うことができた。そのうち1名は、彼女の家で開かれたホームパーティーに顔を出してくれ、皆で彼女の手料理を囲み、カラオケに興じた。彼女の家はバンコクの隣に位置するノンタブリーの閑静な住宅街の一角にあった。2階建てで、3人で暮らすには余裕のある広さであり、内部はタイ北部の装飾品で飾られ、重厚な趣であった。公務員なので、収入はそれほど多くないとのことではあったが、ゆとりの感じられる生活ぶりであった。

2日目は、ラチャブリやナコンパトムをドライブし、夕方にはその日の滞在先である、Thajean川沿いの、Srivisai Raft（水上バンガロー）へと車を走らせた。川沿いにあるレストランからモーターボートで対岸のバンガローに向かう。ここでは外国人観光客の姿はなく、タイ人流のリゾートを体験することができた。バンガローは4戸あり、テラスとベッドルーム（トイレ・水道しかないバスルーム付き）から成っており、広さは各6畳ほどであろうか。看護婦であるギフトさんは、水道の水をコップにとって水質をチェックしていたが、あまり芳しくなかったようで、顔を洗う時には飲料水を使っていた。バスルームで使った水はそのまま木の床の隙間を通って川へ垂れ流し。トイレは和式に似たタイスタイルの便器で、桶から水を汲んで流すタイプ。この下水がどこへ流れているかは謎であった。川に飛び込んで泳いでいるソンさんの姿を見て、汚染の進んでいるチャオプラヤ川とは違い、この川には自然の浄化作用があるのだと解釈することにした。川はタイ人の生活に密着しており、川に対して特別な思いがあるように感じられた。ソンさんの仕事は川の環境対策であり、今年の秋には研究のため来日したいと語っていた。

タイでは、日本人は水にあたることがあるので注意が必要と言われており、食べ物について神経質になっていた。ホームステイでタイの人々と行動を共にするようになってからは、「郷に入っては郷に従え」を実行して、あまり気にしなくなっていた。それからは、タイの多彩な食文化を満喫できた。タイ人の食に対するこだわりや執着は強く、朝だ、昼だ、晩だと三度の食事の心配をしてくれるため、この滞在中空腹感を感じることは全くなかった。恐らく、これが客に対するもてなしなのであろう。私が「アロイ（おいしい）！」を連発していたので、「ナオコは何を食べてもアロイだね」と笑われていたが、香辛料や香草をふんだんに使った独特の味は忘れ難いものになった。青年招へいの際、食文化の違いに気を使うものであるが、はじめは「生魚は食べられない」と言っていた青年たちが、「刺身やすしが好き」と喜んで生魚を食べている姿には驚かされる。食べ物の好き嫌いは、宗教上の理由等を除けば、食わず嫌いのケースが多いと思われる。相手国の食文化を知る

機会を提供することは交流の第一歩かもしれない。

夕食時に、ASEAN 混成グループの仲間だったというチャイさんが仕事を終えて、私たちに合流した。テラスで夜更けまで、ギターの伴奏により、タイや英語の歌、日本で覚えたという「四季の歌」「鼻」などを皆で歌った。共通の歌がどうしても欧米の歌に偏りがちになってしまうのは残念な気がするが、言葉の壁を超えて楽しめる音楽の素晴らしさを実感した。コミュニケーションの手段としては言葉が重要な要素であるには違いない。ホームステイ中は、英語でコミュニケーションを取ることができたが、パオさんのご主人ジョイさんは英語嫌いなので、私は日タイ会話集を片手に孤軍奮闘。共通語としての英語の便利さは否めないが、タイや日本では英語を話さない人が多いので、片言でもいいから相手国の言葉を話す努力をすることは、コミュニケーションの円滑化を図り、相手を理解する一助となることを痛感した。

最終日には、パオさんの大学時代の恩師の、川に面した東屋のような所を借り、テイクアウトした食事を広げ、昼食をとった。このホームステイ中、それぞれのゆかりの人達を紹介してもらう機会が多く、年長者を敬い、親戚付き合いを重んじている姿に触れることができた。昔の日本を彷彿させる光景だった。年長者から子供まで、掌を胸の前で合わせる「ワイ」で、礼儀正しく挨拶を交わすので、私もそれに倣った。

10 日間という短期間の体験から、タイ人気質や価値観を語ることは難しいが、本音と建前が日本的なものと思い込んでいた私は少々驚いた。たとえば、誘ったり、招待した時、「喜んで行きますよ」というのは、社交辞令や挨拶言葉らしい。「〇〇さん、来ないなぁ」と心配しているのは私だけのようで、タイの人たちはいっこうに気にする様子もない。タイと日本には何かアジア的な類似点があるように思われ、親近感を覚えた。私たちは欧米諸国の価値観に左右されがちで、それと相容れないものは否定してしまう傾向にあるが、国際社会ではそれぞれの国の価値観を尊重し、一つの物差しで計ることなく、お互いの違いを認め合っていかなければならないと思う。今までは、日本の文化・習慣に順応しようとする青年達の姿しか見ていなかったので、その背景にある国を理解するまでには至らなかった。今回、私たちが出会った青年達は、対日感情も良く、青年招へい事業に対して高い評価をしていた。そして、この事業をきっかけに日本と関わりをもったり、またその意欲をもっている人たちもいた。しかし、同窓会への加入率 25 パーセントを見ると、そういう人ばかりではないことがうかがえる。年間 150 名を選考しなければならないため、なかには日本への関心が薄い者、観光や買い物目的の者も出てくる可能性がある。この事業も過渡期にあって、今後は選考方法を再考し、本当に意欲のある者に絞り込んだり、双方向の交流に発展させることも考慮する必要があるのかもしれない。バンコクの街には日本車や日本製品が溢れており、日本は身近な国であるはずなのに、タイ人は欧米指向が強いと言われている。物的交流に加え、人的交流の重要性を痛感した。その点で、青年招へい事業は着実に成果をあげていることが今回の調査を通じて分かった。招へい青年が、帰国後その経験を生かし、日本との関係を築いていきたいと考えるかどうかは、私たちの双肩にかかっていることを肝に銘じて、これからも活動を続けていきたいと思う。

二．「親切にする側される側」　　大内 久美

初めて訪れたタイは、目覚ましい経済成長の真っ只中にある。しかし、悪評高いバンコクの交通渋滞は想像以上で、どんより霞んだ空の下を車のない庶民はゲホゲホしながら歩

いているし、路地を入ればボロ屋が並び、まだまだ貧しさがうかがえた。近代的高層ビルを背景に広がるクロントイスラムの写真を見た父曰く「ちょうど戦後の日本はこんな感じ」。

そんなタイでのホームステイ、水のシャワーと衛生状態の心配な家庭料理を覚悟していたから、バストイレ付きの部屋での厚遇に驚いた。祖父母の代に中国から移住したというホストファミリーは、一家で建設会社を経営する裕福な家庭であった。

小学生の甥はインターナショナルスクールに通い、対応に困るくらい流暢に英語を話す。夫婦・兄弟で友人の日本土産のつぶつぶいちごポッキーをほおばり、ファミコンに熱中し、初挑戦する私が当惑する始末。日曜には家族揃って中国系の教会に出かけ、一族・友人と昼食を共にする。タイでも華人の結束力及び経済力を実感し、経済発展の原動力を垣間見た気がした。

２泊３日のホームステイ中ほとんど外食し、いろいろとお世話をしていただく上にご馳走になるばかりで申し訳なかった。恐らく私は、豊かな国の自分が貧しい国の人に金銭的負担を掛けるのは妙に居心地悪い、という概念に囚われていた。これは「先進国・日本人」であるという驕りなのだろう。本来、人と人で交わされる親切のやりとりに先進国も途上国も無関係で、そうしたやりとりが自然にできることこそ、人間として大切なのだろう。

親切にする側には常に優位性を与えるので簡単になれるが、逆に、親切を素直に甘受する側になるのはなかなか難しいと知った。

タイはどこまで近代化、経済発展を望み、突き進むのだろう。私たち「先進」諸国は、どこまでＯＤＡを供与し続けるのか。近代化した小綺麗で豊かな日本は居心地が良いが、私たちはその代償に日本の子供にはないタイの子供たちのキラキラ輝く瞳に象徴される大切な「何か」を失っていると痛感し、「そんなに進歩を追求しないで」「高齢社会や深刻な老人問題に象徴される日本社会・家庭の崩壊を教訓に、あなた方の、タイ（中国？）古来の大家族を大切にして」と訴えずにはいられなかった。

今回のタイ訪問は、普段の旅行では決して行けない訪問先、出会えない人、聞けない話、と得難い経験尽くしで、特にホームステイは格別だった。大学時代に交換留学のボランティア活動をして以来、一庶民の自分にできる最良の国際貢献とはホストファミリーになって心を通わせることだと夢見てきた私が、短いながらもホストされる側になれたのは本当に幸運である。それは、自分の家では味わえない家庭のあり方を体験し、日頃忘れがちな自分の家庭への愛着、感謝の念を想起させ、国境を超えた「親切」を教えてくれた。

こんな良い体験は、成績や専門性に関係なく、広く庶民に門戸を開放して経験させてほしい。その点で、厳密な高い選抜基準のないこの青年招へい事業は非常に素晴らしい。ただし国民の税金でまかなわれている以上、バブル経済前兆の 84 年に開始されて以来に 14 年目を迎える本事業が時流にかなった変革を求められているのも確かであろう。

世界的にみて好調な経済成長を遂げる東南アジア諸国の青年を経済大国のお手本気取りで「援助」するばかりでなく、成長の限界や弊害をも彼らに伝え、共に学び合い、親切を交わす関係を築きたい。

ホ．「タイ訪問において特に印象深かったこと」　　高村 裕

タイ訪問２日目の晩、私たちはＪＩＣＡ主催の夕食会に招かれた。渋滞のため夕食会場に予定より遅れて到着した。ＪＩＣＡ事務所次長の斎藤氏と小川氏はすでに到着されていた。まず、交通渋滞を含む都市計画の問題が話題になった。タイでは政権が代わるごとに、

政治家や利益団体の利害関係によって前の政権の計画が大きく変わることが珍しくないことであった。ＪＩＣＡの方々の苦労がうかがわれた。

非常に印象深かったのは、斎藤氏の「泥まみれの豚の話」である。以前、氏がタイの地方の農家に招かれた時のことである。その農家の方は、氏に家畜の泥にまみれた豚を見せてくれたそうである。地方において、ほかにこれといって見せて客人を喜ばせるものがなかったので、一番大事にしている家畜の豚を見せることをもって、客人を遇したのである。その心を汲み取った氏は、こういう方々のために仕事をしなければならないと思われたそうである。

氏によると、主としてＪＩＣＡの仕事上、直接会う機会があるのは相手国政府の政治家や官僚である。ＪＩＣＡのスタッフが相手国の国民のために一生懸命作った計画に対し、ときには彼らの消極的態度や、やる気のなさによって、非常にやるせない気持ちにさせられることもあるそうである。そのようなとき、「私たちの本当の仕事の相手は、政治家や官僚ではなく、あの泥まみれの豚を見せてくれた農家の方のような一般の国民なのだ」と思って、再び仕事に励むそうである。

２時間以上にわたる夕食会の中で、ＪＩＣＡのスタッフの方々の、仕事に対する情熱、使命感、責任感を、言葉の端々から感じた。レストランからホテルへ向かう車の中、とてもすがすがしい気持ちになった。斎藤氏の穏やかで実直な話し振りが、今も瞼に浮かぶ。

帰国青年同窓会会長宅における朝食会で、果物農場（帰国青年活動現場）で知り合った方々から、青年招へい事業に今後、参考になる率直な生の声を聞くことができた。両方で共通していたことは、この事業も始まってから 10 年が過ぎ、初めの頃に来日した青年と比べると、現在来日してくる青年は、日本で積極的に交流したり、何か学ぼうとする意欲がない人でも選ばれているとのことである。招へい数が増えているにもかかわらず、応募資格のある青年の総数が減っている（一度参加した青年は参加できない）ため、初期には考えられないほど容易に来日できるようになったらしい（来日青年を選考している国立青年局によると、現在では、倍率はわずかに２倍程度しかないらしい）。したがって、果物農園において知り合った過去の来日青年によると、現在の来日青年の中には、１カ月無料で日本にバカンスに行くだけという感覚の人も少なくないという。これには、私たちもショックを受けた。もちろん、すべての青年がこのような感覚でいるわけではないと思うが（私のホームステイのホストのスニットさんは国際交流の意欲の塊のような人であった）。

ホームステイのホストのスニットさんは、昨年の ASEAN 混成（教育）グループでの来日青年であり、今回の滞在中に出会ったタイ人の中で最も親しくなったひとである。とにかく親切でよくしゃべり、バイタリティに溢れた人であった。彼はなんと私がタイに滞在していた 10 日間のうち、７日間も（つまり、シリンドーン・インスティチュートで初めて彼に会ってから、タイ出国の日まで毎日）私と行動を共にしてくれた驚くべき親切な人であった。

彼はまず、パクチョンにある彼の職場、シリンドーン・インスティチュートから私たちと一緒にバンコクまで来て、アフターケアー調査チーム全員をチャオ・プラヤ川ナイトクルーズディナーに連れていってくれた。

翌日、ホームステイのために、彼は運転手さんと車を伴ってホテルまで迎えに来てくれた。３日間のために、わざわざ運転手さんと車を用意してくれるとは、予想もしてなかったので非常に驚いた。まず、ラマ５世博物館を見学した後、私たちはパクチョンにある彼

の家に向かった。

彼は、日本ならば４人家族が住むほどの広さのきれいな一戸建ての家に一人で住んでいた。家の周辺は、２、３戸の近所の家を除くと一面、畑であった。庭にはものすごく多くの種類の熱帯植物が植えられ、そこだけが周囲と別世界であった。

私のために用意してくれた部屋に荷物を置いた後、彼の愛車のカブ（日本では新聞配達の人が使っているバイク）に２人乗りで、パクチョンのキャンプ場までツーリングに出かけた。もちろんヘルメットなどなかった。途中、彼はおもむろにバイクを止め、駄菓子屋に駆け込み、ワインのボトル２本を持って戻ってきた。「２人乗り、ヘルメットなしで飲酒運転か！」とたまげていると、ボトルの中身を燃料タンクに注ぎ込み始めた。タイではバイクの燃料は、ワインのボトルに入れて売っているらしい。しかし、日本のガソリンとは違う異臭がした。何を使っているのだろうか。

その夜は、スニットさんの隣の家で夕食をごちそうになった。スニットさんの配慮で料理を作る段階から参加した。その家には３人の女の子がいたが、１人は私たちと一緒に食べないので、なぜかと尋ねると、ダイエット中とのことであった。「日本と変わらないなあ」と思った。スニットさんは一人暮らしのため、いつも外食ばかり（タイではそのほうが安上がりらしい）なので、普通の家の食事を作り、食べさせていただけたのは貴重な体験であった。

ホームステイの３日間で、パクチョン、コラート、ピマーイの遺跡・博物館・湖滝・植物園や、カオサイ国立公園、スニットさんの友人のセラミック工場など10数カ所以上の場所につれていってもらった。短期間に、あまりに多くの所に行ったので、半分ほどは行った先の名前を忘れてしまった。どうしてこれほどたくさんの名所を知っているのかと尋ねると、彼は現在の仕事に就く前、フリーの観光ガイドをやっていたとのことであった。「ここのおみやげ屋さんは高い」とか「あそこで写真をとったほうがよい」などと、やたらと詳しいのはそのためであった。

ホームステイが終わってからも、彼は私の滞在していたホテルの部屋に泊まり、そこから仕事に出かけ、仕事が終わるや否や戻ってきて私たちを様々な所に案内してくれた（私は彼の家に２泊滞在し、彼は私のホテルの部屋に２泊した）。このようにして、最後の最後まで（空港に向かう車の中まで）彼は一緒にいてくれた。

帰国後も、私がタイの伝統的なフルートの演奏を聴きたいといっていたのを覚えていて、そのカセットテープを送ってくれた。さらに私の誕生日も覚えていてくれて、タイからバースデイ・コールをくれた。

これほどまで厚くもてなされるとはまったく予想しなかった。これは、彼の親切な人柄に加えて、彼が日本滞在中に、日本人にとても親切にされたからであると思う。彼は、日本滞在中に出会った多くの日本人について、たいへん鮮明に覚えていて、懐かしそうに、「日本人は私にとてもよくしてくれた」と語っていた。彼が出会った多くの日本人の親切が、私にかえってきたのだと思う。本当にありがたいことであると思う。この知らない人どうしのつながりがこれから無限の連環に発展するよう、微力ながらも努力しようと心から思っている。

(3) 提言

イ. 問題点

- 招へい青年の質が年々低下。
- 同窓会がうまく活動していない。
- 青年の帰国で本事業が終了してしまうケースが多い。その後、日本青年と帰国青年との交流が持続しない。

ロ. 問題点の原因または理由

- 招へい人数が多く、窓口機関であるNYBは数をこなすのが精いっぱいで、質を吟味する余裕がない。目的意識がなく、意欲的でない青年が少なくない。
- 同窓会の組織が未熟。タイが広いということもあり、まとまりがつかず活動が難しい。また、オフィスを構えていない。
- 交流の持続を目的とした組織がない。同窓会をうまく活用できていない。青年の意欲がない。

ハ. 改善のための具体的方策

- 招へい人数を減らし質をよくする。もしくは選考委員の人数を増やし、より詳細に吟味する。目的意識の高い青年を招へいする。現地の広報活動に力を入れ広く一般公募することで裾野を広げる。
- 同窓会活動が活発にできるよう資金面その他の援助を強化する。
- 交流の持続を目的とした組織を作る。同窓会で交流を続けられるよう活動環境をよくする。日本でも同窓会を作る。

ニ. その他

- 日本青年の派遣も必要。
- 本事業の中でもメインとなる合宿セミナー及びホームステイの参加候補者を広範に増やす。

中華人民共和国

平成8年12月24日～12月31日

社団法人 青年海外協力協会

Ⅰ. 調査目的

1. 調査目的

- 中華人民共和国（中国）の社会・教育事情を視察し、今後の教育分野青年受け入れプログラムの改善に役立てる。
- 中国の青年招へい事業の窓口機関である中華全国青年連合会（全青連）と、日本国内での実際のプログラム内容等に関する意見交換をすることにより、青年招へい事業に対する一層の周知と理解を促し、あわせてプログラムの改善点についてのヒヤリングを行う。
- 中国の帰国青年の連絡網の整備状況を視察して、日本側のプログラム参加者とのより一層の継続的交流を促進するために何をなすべきか調査する。
- 帰国青年の職場視察や交流会を通じ、青年たちの日本における研修成果の確認を行うとともに、日本への関心の継続を図る。

2. 調査内容

(1) 国際協力事業団（Japan International Cooperation Agency：ＪＩＣＡ）中国事務所訪問

- 中国の一般事情、ＪＩＣＡの活動状況及び青年招へい事業運営状況概説

(2) 中華全国青年連合会（全青連）訪問

- 組織活動状況聴き取り、青年招へい事業に関する意見交換と要望事項聴き取り

(3) 帰国青年との交流会

- 青年のもつ対日イメージや感情がどのようなものであるかを体感するとともに、それらがより深く正確なものとなるよう促進する。

(4) 帰国青年活動現場（職場）訪問

- 帰国青年が滞日経験をどのように活かしているか

(5) ホームステイ

- 中国の一般家庭生活を通じて、中国の規範や価値観等に触れ、中国のより正確な理解を図る。あわせて、多様な異文化の共存、相互尊重に対する認識を深める。

3. 調査団員

	氏名	所属先	青年招へい事業との関わり
リーダー	村上 和栄	津山と世界を結ぶ会 県立勝間田高校	分野別地方プログラム担当者
メンバー	三谷 隆子	津山と世界を結ぶ会 主婦	分野別地方プログラム担当者
メンバー	岡本 俊則	津山と世界を結ぶ会 有限会社大崎物産	分野別地方プログラム担当者
メンバー	大瀬 貴生	青森県青年海外協力協会 八戸工科学院	分野別地方プログラム担当者 ホストファミリー
メンバー	米村 幸弘	青森県青年海外協力協会 農業自営	分野別地方プログラム担当者

Ⅱ. 調査結果

1. 日　程

12月24日（火）

10：35　関西国際空港（関空）発（JL785便）
12：20　北京首都国際空港（北京空港）着
13：30　華都飯店（ホテル）チェックイン
14：45　ホテル出発
15：00　ＪＩＣＡ中国事務所訪問
16：30　在中国日本大使館訪問
18：00　歓迎宴（全青連主催）（華風賓館）
20：10　ホテル帰着

12月25日（水）

08：45　ホテル出発
09：25　中華全国青年連合会（全青連）訪問
10：00　中国帰国青年とミーティング
12：00　昼食（北京人人大酒楼）
14：00　北京市内視察（故宮博物館、天安門広場など）
18：00　答礼宴（日本側主催）（京信烤鴨）
21：30　ホテル帰着

12月26日（木）

09：00　ホテル出発
09：30　北京第一六一中学（北京１６１中学）訪問（青年活動現場）
11：30　昼食（嘉年華大酒楼）
13：30　北京電視台（北京テレビ局）訪問（青年活動現場）
15：15　北京市内視察
17：10　夕食（聚福楼）
18：40　ホテル帰着

12月27日（金）

08：10　ホテルチェックアウト
09：10　万里の長城見学
11：40　昼食（首都大酒店（日本料理“京樽”））
13：10　首都大酒店発（天津へ）
16：00　天津友誼賓館（ホテル）着
18：10　歓迎宴（天津市青年連合会主催）（天津友誼賓館）
20：00　歓迎宴終了

12月28日（土）

08：40　大瀬、ホームステイへ
09：00　ホテル出発
09：20　天津科学技術館視察
10：30　天津市内視察
12：30　昼食（天津狗不理）
14：00　ホテル帰着
14：30　ホームステイへ出発

12月29日（日）

午前　　ホームステイ
14：00　ホテル帰着
14：30　ホテル出発（北京へ）
16：40　華都飯店（ホテル）チェックイン
18：30　夕食（麻浦焼烤店）
19：40　ホテル帰着

12月30日（月）

09：00　ホテル出発
09：30　北京市内視察（天壇公園、北京動物園）
12：15　昼食（東北大菜）
13：20　ホテル帰着
13：35　ホテル出発

13：55　北京市内視察（繁華街）
17：30　夕食（聚雅酒家）
19：10　“雑技”鑑賞（天地劇場）
20：45　ホテル帰着

12月31日（火）
10：30　華都飯店チェックアウト
14：30　北京空港発（JL286便）
18：20　関空着

2. 主要面談者

(1)　ＪＩＣＡ中国事務所
熊岸 健治 所長
藤本 正也 所員

(2)　在中国日本大使館
川淵 幹兒 一等書記官

(3)　歓迎宴
全青連　劉 合華 副秘書長
全青連　湯 本淵 国際部副部長
全青連　倪 健 国際部副部長
日本大使館　川淵 幹兒 一等書記官
ＪＩＣＡ中国事務所　藤本 正也 所員

(4)　中華全国青年連合会（全青連）
袁 純清 副主席
湯 本淵 国際部副部長
王 希宏 国際部幹部

(5)　帰国青年との交流会
ＪＩＣＡ中国事務所　藤本 正也 所員
全国鉄道団委　房 光輝 常任委員
中国少年先鋒隊全国工作委員会　高 彦明
中国青少年研究中心　呉 魯平
共青団中央弁公廳編刊處　李 冬梅 副處長
北京青年報　肖 培 総編輯
陸文学　孫 童華 編集長

(6) 答礼宴

日本大使館　川潤 幹兒 一等書記官
ＪＩＣＡ中国事務所　熊岸 健治 所長
ＪＩＣＡ中国事務所　藤本 正也 所員
ＪＩＣＡ中国事務所　趙 明 所員
全青連国際部　湯 本淵 副部長
全青連国際部　倪 健 副部長
全国青年報刊協会　華 偉 副秘書長
全国青少年社会服務中心　賈 俱 副主任
人事部流動調配司調配処　唐 志敏 副処長
北京電視台国際部幹部　徐 春梅
全青連国際部幹部　王 希宏
"人民日報"記者　董 宏君
全青連国際部幹部　洪 桂梅

(7) 帰国青年活動現場

イ．北京１６１中学
副校長　李 正華
教務主任　馬 静

ロ．北京電視台
副総編　賈 玉祥
弁公室副主任　田 方
弁公室　馬 莉
播出部副主任　周 宜根

(8) 天津市青年連合会
主席　杜 彩霞
副主席　羅 世龍
副秘書長　肖 惠
天津に随行　全青連国際部副部長 湯 本淵

(9) 全行程に随行
全青連国際部幹部　李 金福

3. 調査結果概要

今回は帰国青年の活動を視察し、彼らの意見を聞くことを大きな目的としていた。中国の場合、訪日青年は全青連の各地域・団体からの推薦である。３～４年前に訪日した青年について、帰国後の個々人の動向をすべて北京で把握するのは困難なようである。中国の

社会状況の変化により、転職や留学している帰国青年も多く、連絡がとれない人もいる。再会を楽しみにしていた私たちには残念であったが、青年たちは訪日体験を活かし、中国社会で活躍している。

帰国青年の何人かに話を聞くことができ、青年たちが青年招へい事業を肯定的に受け入れていることはよく分かったが、帰国青年の同窓会活動が具体的にどうなっているのかは聴取することができなかった。

帰国青年の話を聞くと、みな身近な人が日本軍の犠牲になっている。そのため訪日前は日本についてよい印象を持っていなかった。ところが訪日によりその印象が全く変わり、「中日友好の意味がよく分かった」と口々に語ってくれた。彼らが指導者層であるため、日本人の良い面や中日友好の意義等を多くの中国人に伝えられる立場にある。彼らが多くの中国の人々に日本を、また中日友好を語ることが、青年招へい事業の目的でもある。青年招へい事業は着実に中国で根を張っている。

今回の訪中で最も役に立ったのは、中国の最新事情に触れたことである。青年たちがそうであったように、訪中の前後で団員の対中イメージも大きく変わった。北京・天津という大都市だけの滞在であったためもあろうが、“交通渋滞”“もののあふれるデパート”“スーツ姿の中国人”“高層ビルの建築ラッシュ”が当たり前の光景であることは大きなショックであった。「百聞は一見にしかず」である。

また、中国ではまず認められない中国人家庭でのホームステイが体験でき、庶民の生活を知るうえで大いに役立った。

今回のアフターケアーチームは、地方受入団体のメンバーだけで構成されている。今後の青年の受け入れと帰国青年たちとの友情の継続に、この体験を大いに活かせると確信している。

4. 現地調査・活動内容結果

(1) 表敬・訪問先における意見交換や聴取内容

イ．ＪＩＣＡ中国事務所

熊岸所長より青年招へい事業の開始から今日に至るまでの経緯及び中国での当事業の意義について説明を聞く。

戦争を含む過去の歴史的関わりを考えると、対中関係はどうしても他の国々との関係とは異なったものにならざるを得ず、この事業は新しい日中関係を構築するうえで重要な位置を占めている。また、中国側としても、この国で得られる日本の情報は乏しく、日本訪問はきわめて貴重な体験であるとの評価が高い。

「中国青年招へい事業」は本年度をもって第２期５カ年計画を終了し、来期より新５カ年計画が開始されることになっている。今までの中国側受入機関であった全青連としては、来年度以降も全青連を窓口とした関係を継続できるかどうかに非常に強い関心と希望を持っている。この点について現時点ではまだ結論は出ておらず、年明けよりＪＩＣＡの調査が始まることになっている。

ロ．在中国日本大使館

川淵 一等書記官より青年招へい事業及び中国の教育の現状について話を聞いた。

①青年招へい事業の評価

当事業は政府開発援助（ODA）の中でも青年交流の側面をもつ数少ない事業である。現在、全青連がＪＩＣＡのカウンターパートとなっており、過去10年で約950人の中国青年が来日しているが、中国外交部からの評価も高い。この事業では、日本各地の地方ボランティアの協力が不可欠であり、そのことは中国側にも強調してあるそうだ。

②招へい青年の人選

来日青年の年齢が他の国に比べて高いのは、中国側としてはこの貴重で数少ない機会を有効に生かそうと、極力指導者層の派遣を希望しているためである。

③中国の教育の現状

中国での義務教育は9年であり、現在その達成率を高める努力がなされているが、農村部ではまだ困難な状態が続いている。特に地方での女子の教育は不十分であり、全青連や婦女連といった団体が募金をつのり援助している。中国政府は教育に力を入れているとはいえ、中国における教師の待遇は一般公務員に比べて高くはなく、苦しい財政の下で教育の順位はまだ高いとはいえないようである。一方、都市部での教育熱はきわめて高く、一人っ子政策がそれに拍車をかけている。子供たちは将来大学へ入るため、まず重点中学に入るための受験戦争に勝たねばならない。御多分に漏れず、中国は日本よりははるかに学歴社会なのである。

ハ．中華全国青年連合会（全青連）

青年招へい事業の中国側の窓口である全青連を訪問し、袁純清副主席と会談を行った。袁副主席の発言内容は以下のとおりである。

①青年招へい事業について

毎年100人の青年が訪日し、10年で約1,000人を派遣した。しかし、3億5千万人の中国青年にとっては数十万人に1人の割合である。したがって、訪日する青年は各分野の指導的立場にある人を選んでいる。毎年派遣する青年の10人程度は政府の高い地位にある者である。経済グループの青年は経営者としても優秀である。教員は大学の教官または各学校の校長レベルの人である。帰国青年の多くは昇進している。大学の副学長になった者もいるし、1980年代後半に訪日した団員の何名かは局長になっている。

②全青連の役割

この事業が成功しているのは、全青連の求心力によるところが大きい。全青連には教育部、文化部があり、規模としては日本の総務庁青少年対策本部より大きい。中央集権的で、各地方に支部があり、約2万人の専従スタッフがいる。なかでも国際部は最大で、その中に日本担当の部署がある。中日関係の重要性をよく認識しているので、日本担当には特に優秀な人材を充てている。青年招へい事業は中日両国の友好をめざしたプログラムであると認識している。中日発展に寄与している。

③青年招へい事業の評価

青年招へい事業はとても有意義なものである。青年招へい事業の中で一番印象に残ったのはホームステイだと聞いている。この事業は青年たちの視野を広げることに多いに役立ち、また、帰国青年同士の連帯感も生まれている。日本側関係者に感謝している。

全青連は青年招へい事業を続けていきたい。

これに対して団長が、青年たちの勤勉さ・熱心さに感心し、当事業が日中の青年の交流事業として末長く続き、日中友好の懸け橋となることを望んでいる旨の挨拶をして、会談を終了した。

(2) 帰国青年活動状況

イ．北京第一六一中学

帰国青年：馬 静（平成5年度教員）

馬さんは現在当校の教務主任で、副校長に次ぐポストにいる。帰国後、日本の教育や訪問先のことを教師や生徒によく話しているので、「みんな日本の教育や文化に対して関心をもつようになった」と副校長の李 正華さんが話してくれた。

当中学は1913年、第一女子中学校として創立され、1968年に男女共学の中学となり、1972年に現在の名称に変更した。現在、中等部18クラス高等部12クラスがあり、全校生徒約1400名、教師90名、その他の職員40名の体制となっている。1985年以降教育改革がなされており、教育委員会の定めている必修科目のほかにコンピューター・環境・英語などの選択教科や課外活動にも力を入れている。さらに、21世紀に向けての人材育成のために、高等部では創造性を高める授業（実験・教師との対話形式の授業・第二外国語など）に積極的に取り組んでいる。テレビやコンピューターなどの教育機器も利用しており、日本のやり方に近くなっている。

いじめや不登校について質問してみたが、その状態を理解してもらえなかった。ただ生徒の人間関係では競争と協力を重視している。たとえば、経済的理由で学校を続けられない生徒には、学校独自の奨学金のほかに生徒同士の援助もなされている。

この中学は重点中学に指定されており、教師の質はもちろん、施設・設備も国内最先端である。図書室には数多くの本や資料が整えられており、コンピューター教室には数十台のパソコンが置かれていた。視聴覚教室は教材提示装置に大型のテレビモニター、ビデオ、オーバーヘッドプロジェクター（OHP）、照明装置等が完備され、授業の効率アップのためだけでなく、教師の研修用に優れた授業を記録するためにも活用されている。

生徒は目を輝かせて授業を受けており、いじめや不登校とは無縁な様子が見てとれた。中学1年生が即興で英語の歓迎スピーチをしてくれ、印象に残ったが、日本の中学生よりも英会話能力がかなり高いように感じられた。

ロ．北京電視台（北京テレビ局）

帰国青年：徐 春梅（平成8年度経済青年）

徐さんは国際部で日本向けの放送などを担当しているが、当日は急用のため同席できなかった。

北京電視台は17年の歴史をもち、2,000人の従業員を要している。中央電視台に次ぐ経済力があり、約30ある地方テレビ局のトップに位置している。番組を放送するために28の会社を持ち、広告収入が事業収入の99パーセントを占めている。視聴者は北京周辺の2700万人であるが、ネットワークを通して中国全土に番組を供給しており、日本のＴＢＳをはじめ世界各国のテレビ局と提携関係を結んで番組を提供している。現在110階建てのテレビ交流通信センターの建設を計画している。

1990年にＪＩＣＡから33億円の放送設備が無償供与され、現在も中心的な設備として機能しているが、耐用年数が経過したので、現在は自前で設備の更新を行っている。

中国ではテレビの役割を政府の広報と国民の娯楽と考えている。したがって、反政府・反社会的内容の番組は放送しない。番組内容は記者、各部門、国民の３段階でチェックされる。また、北京市人民代表大会常務委員会と北京市協商会議委員からチェックを受けることもある。

番組制作現場では視聴者参加の和やかな討論番組が収録されていたが、テレビ局周辺の警備は日本とは比較にならない緊張感を漂わせていた。

(3) 交流会・セミナー

イ．交流会

出席者：調査チーム　村上 和栄、三谷 隆子、岡本 俊則、大瀬 貴生、米村 幸弘
ＪＩＣＡ中国事務所　藤本 正也 所員
青年　王 希宏、房 光輝、高 彦明、呉 魯平、肖 培、李 冬梅、
孫 童華、李 金福（通訳）

交流会は日本を訪問した青年５名の話を聞いた。「日本訪問の前後で日本についての印象に変化があったか」という質問に答える形で話が進んだ。内容は以下のとおりである。

①李 冬梅（平成８年度青年指導者）

日本のことは新聞や本から得た知識で、仏教や文化などが中国と似ていることを知っていた。また、両親からは、第二次大戦の時日本軍が大砲を自宅の屋根に置いて発砲したことを聞いており、「日本人は戦争好きの野蛮人」だと聞かされていた。両親祖父母とも日本が嫌いだった。

訪日して印象が全く変わった。日本人の多くは平和好きなことが分かった。合宿セミナーやホームステイを通じて日本人と友達になった。皆、心をこめて受け入れてくれた。日本が好きになった。

21世紀に向けて中日友好協力を考えることが多くなった。印象が変わったことは祖先に背くことではなく、歴史の発展である。

②房 光輝（平成６年度公務員）

祖父母、伯父、伯母は日本の空襲で死亡した。印象については李さんとほぼ同じ。日本人は友好的に受け入れてくれた。今でもホストファミリーと文通している。日本人の仕事に対する熱心さ、仕事に就く姿勢を学びたい。また、日本の精神文明が高いことも印象に残った。ホストファミリーに感謝している。

③高 彦明（平成８年度教員）

児童少年にかかわる仕事をしている。中国には１億３千万人の児童がいる。彼らを代表して、日本の子供と教師に私たちのご挨拶を伝えたい。

印象は前の２人と同じ。日本の経済発展に驚いた。都市と農村の差があまりないことが中国とは違う。いろいろなサービス施設が便利だ。また、教育を重視していることにも感心した。教師の質が高い。いじめ問題の対策に関心を持った。日本人は仕事熱心で、優しく、お客が好きである。原爆資料館を見て、みんな平和を望んでいることがよく分かった。私の伯父も日本軍に殺された。青年招へい事業に参加して、中日友好の意義がよく分かった。

④呉 魯平（平成７年度教員）

（「若い日本人は個性が強くなって、学校で公共のマナーを教えるのに苦労している。中国ではどうか」という質問に対して）

妻が小学校の教師をしている。学校の管理は厳しい。中国では両親が共働きなので、子供の世話は祖父母の役割になっている。一人っ子なので特に祖父母に甘える傾向はある。学校では個人主義（自分勝手）の問題に注意して、厳しく教育している。

⑤肖 培（平成６年度青年指導者）

青年招へい事業は両国青年の接触と交流の機会を提供している。ＪＩＣＡの努力に感謝している。合宿セミナーが一番印象に残った。セミナーの出席者がその後北京に留学した。訪日したメンバーがその人をよく訪ねて便宜を図った。

両国の青年の認識が一致したので、この事業はうまくいっている。交流が基礎になって認識が深まる。全青連も大きな役割を果たした。全青連が中国では一番発言力のある青年団体だ。

⑥孫 童華（房さんの妻、「青年招へい事業」には参加していない）

もっと早く日本を知りたかった。夫のホストファミリーと文通するために夜間の日本語教室にも通った。これからも日本と友好的に付き合っていきたい。

ロ．天津市青年連合会歓迎宴

出席者：調査チーム　村上 和栄、三谷 隆子、岡本 俊則、大瀬 貴生、米村 幸弘
天津市青年連合会　杜 彩霞、肖 惠
全青連　湯 本淵、李 金福（通訳）

平成８年度公務員グループの団長で来日した杜主席は次のように語った。

「たった１カ月の滞在であったが、多くの人と交流し、たくさんの友人をつくり、良い経験をしたと思っている。日本の青年たちとの懇談で、多くの事柄について共通の認識を得ることができた。青年招へい事業で中日の青年が交流することは、中日友好にとっても非常に良いことである。知識として知ることよりも、自分の目で見て分かることが青年たちにとっては大切だ」

天津市青年連合会では９人いる副主席のうち１人は岡山県の大学に現在留学している。また、93年に津山を訪れた黄 一濱さんは現在ニュージーランド留学中である。

天津市は人口約１千万人、中国第３の都市である。天津から神戸までは２泊の船旅である。現在、四日市市・神戸市・千葉市と友好都市縁組を結んでいる。

(4) ホームステイ

氏名	ホスト氏名	ホスト職業・参加年度または所属先・家族構成
村上 和栄	董 金梅	天津市希望工程実施弁公室主任　共青団天津市委員会権益部部長 平成7年度　夫・息子・母
三谷 隆子	李 青	天津歌舞劇場女優　天津市青年連合会委員　父・母
岡本 俊則	林 永寧	天津天磁公司総経理　天津市青年連合会副主席　妻・娘
大瀬 貴生	志 強	天津楊柳青書社社長　天津市青年連合会委員　妻・息子
米村 幸弘	馬 成光	天津市河東区衛生局長　天津市青年連合会委員　妻・息子

5. 所感及び提言

(1) 調査団所感

調査団に対する歓待ぶりにも示されるように、全青連の青年招へい事業にかける意気込みには並々ならぬものがある。私たちが「帰国青年の様子を見に来た。来年からのことはＪＩＣＡに要請してくれ」と言い、全青連もそのことは承知しているのだが、表敬訪問や歓迎会の際に「青年招へい事業の中国側窓口としては全青連が最適であると日本に伝えてほしい」と何度も言われた。「訪日の機会あり」というのを全青連の魅力の一つとして持っておきたいという気持ちもあるのだろうが、帰国した青年たちが立派に活躍していることがこうした発言を生む下地になっているのだろう。

帰国青年は、日本で彼らを迎えた時に感じた印象よりも、中国でははるかにエリートであることが分かった。大学進学率が５パーセントで、大学生になることが既にエリートである。青年招へい事業に参加した青年たちはあの膨大な人口を抱える中国の青年指導者層なのだ。一般庶民の人たちとは話をする機会もほとんどなかったので、彼らと一般庶民の違いは分からないが、“特に選ばれた人たち”が日本に来ていると思った。そんな人たちだから時代の先を読んで、帰国後留学したり転職するのも当然のなりゆきかもしれない。

今回の調査団は団員５名中４名が青年海外協力隊のＯＢであった。訪中期間が８日間で、年末だったこともあり、青年海外協力隊の隊員の職場やＪＩＣＡのプロジェクト現場の訪問ができなかったことは残念だった。

(2) 団員所感

イ．「中国の変化するもの、しないもの」　　村上 和栄

中国社会の変化は驚くばかりである。北京空港では入国審査が終了するとすぐに機内預かりの荷物が出てきた。北京市内から「万里の長城」八達嶺まで１時間あまりで行けるようになった。数カ月前までは前者は１時間以上、後者は２時間半はかかっていた。このほか、近代的な高層アパートの建築ラッシュとか自動車の急激な増加も目についた。また、以前どうだったかは分からないが、朝から数多くのチャンネルでテレビ番組が見られるし、デパートには溢れんばかりの商品が並んでいる。このようなモノ、つまりハード面については中国は着実に進歩している。

では、ソフト面、つまりサービスや心の面においてはどうであろうか。「上海に比べた

ら北京は田舎ですよ」と中国人はよく言う。上海には行っていないので中国トップの様子は分からないが、国営企業・公営企業などではサービスは今ひとつである。デパートに欲しいものが並んでいても、販売員がいないために買えないことが何度かあった。全青連や北京電視台のエレベーターには椅子に座ったエレベーター係が乗っていた。足の悪い人を雇っているのかもしれないが、なんとも窮屈であった。このような面では改革開放政策はまだ十分に浸透していないようである。

中国の受験戦争は相当に厳しいとよく聞いていたが、小学生も夜遅くまで勉強している。日本なら塾に通わせるところだろうが、ホストファミリー宅では小学校2年生の息子の勉強を父親が叱咤激励していた。子供は時々口答えしながら勉強していた。「一人っ子のために親の期待が大きい」とも聞かされた。しかし昔から「科挙」の国である。私たちが考えるより「当たり前のこと」ととらえているのかもしれない。

ホームステイ中に“大悲院”というお寺を訪ねた。門前には多くの商店が軒を並べ、有名な寺であることがすぐに分かった。中では多くの人が熱心に祈っている。膝・手・額を地面につけて祈るラマ教やイスラムに近い形である。「これが共産主義国か！」共産革命50年、しかし中国民衆の宗教心を拭い去ってしまうことはできなかったようである。

今回団長をさせていただいたが、歓迎宴等でスピーチと乾杯を繰り返すのには正直まいった。しかも「酒の上での失敗は許されない」という注意をいただいていたので、アルコール度数38度の白酒（パイチュウ、焼酎）を飲みながら酔わない努力を払うというのは並大抵のことではなかった。普段あっさりしたものを食べているのに、油も味も濃い中国の食事に強いアルコール、中国側の歓迎の気持ちに応えるためには多少の無理は承知で飲み食いせねばならず、食事の時間が来るのが恐ろしくさえあった。とは言うものの、全青連副主席の袁氏をはじめ数多くの中国指導者層と語り合えたことは大変有意義であった。今後はそんな人たちと話をする際にも気後れしないだけの人間になりたいものである。

ロ．「庶民生活から見た中国」　　三谷 隆子

中国はトイレ事情が悪いと前々から聞いていた。それは、「トイレにはドアがない」とか「1つの便器に3～4人で一緒に用を足す」といったものだった。ところが、今回はこのようなトイレにはお目にかからなかった。

しかし、トイレに対して最も重要なことを私は知らなかった。村上団長からこう言われた。「トイレにトイレットペーパーを流さないように。中国のトイレは配管が鉄管なので、トイレットペーパーが詰まって錆び、逆流する。使用済みの紙はトイレの横のゴミ箱に入れるように」。そう言われると中国では必ず便器の横にはゴミ箱が置いてある。中国に行く人は気をつけてほしい。

トイレでは中国の人の次のような光景を目撃した。幼い時の習慣からか、トイレに入ってもドアを閉めない。終わった後、外に出て衣服を整える。トイレの順番待ちをしている人がいるにもかかわらず、それを押し退けて自分がドアの一番前に立つ。すべての人がこんな行動をとるわけではないが、北京の有名デパートのトイレで見た店員たちの姿だったのでびっくりしてしまった。

今までホームステイを受けたことはあるが、ホームステイを体験するのは初めてだった。興味・期待・不安、ホームステイを体験する前日まで実に複雑な気持ちだった。体験して初めて青年たちの本当の気持ちが少し分かったような気がする。この経験を今後に役立て

たい。

ホームステイに行くまでは、「お互い漢字の文化だから、漢字でなんとかなるだろう」と思っていたが、実際会話を漢字でしてみると、日本で今使っている漢字と中国で使っている漢字ではほとんどお互いに通じなかった。

「箸は使えますか」と聞かれてしまった。日本人は箸を使うことを中国の人は当然知っているものと思っていたが、訪日したことのない中国の人は日本の食生活についてほとんど知らないことがよく分かった。中国や他の国々の人たちに対して、私たち日本人もこのようなことをしているかもしれない。外国の人を受け入れるときには、基本的な知識をなるべく事前に勉強しておくべきだと反省した。

ホームステイ先のお母さんが私に餃子を作って歓迎してくれた。私も日頃主婦の一員として、餃子は何度も作っていて、餃子の包みには自信があった。ところが天津では包み方が違っていて、悪戦苦闘した。この体験は有意義であった。今度私がホームステイを受け入れた時には、日本らしい食べ物で一緒に料理作りに挑戦してみたい。

中国では紙は貴重品であることを随所で思い知らされた。デパート・ホテル等の領収書は全部カーボンを一枚一枚挟む。ホームステイ先で漢字会話（筆談）をする時のメモ用紙はうす茶色のハトロン紙をうすくしたようなシャリシャリの便箋。トイレットペーパーは再が何回つくか分からないほど再生して、漂白していない、青色や赤色の混じったペーパー。いかに日本は贅沢をしているか。再利用の大切さを痛感した。

北京と天津で、日本との合弁デパート、中国の国営デパート合わせて10軒くらいのデパートを覗いてみた。どのデパートにも品物はあふれるほど何でも揃っているし、日本で最新のものも中国にある。私にはとても買えない高級なもの、高額な商品も揃っている。デザインも日本と変わらない。事前にいただいた資料を参考にお土産を買っていったのだが、「ちょっと恥ずかしいかな？」と思ったほどである。中国を訪問される調査団の方、次回からは考えてほしい。デパートの店員を国営と合弁で比べてみると、国営の店員には共産主義国らしさがうかがえた。

八．「北京の街と一人っ子政策およびホームステイ体験記」　　岡本 俊則

中国滞在中、全青連の青年たちと、中国の一人っ子政策や日本の高齢化社会のことがたびたび話題に上った。一人っ子政策によって将来の中国社会が大変な高齢化率になることは明らかである。それにもかかわらず、この政策に批判的な意見は一度も耳にすることができなかった。「北京の街を歩いて、人間の数がいかに多いかを見れば、この政策の正しさが理解できるはずである」という意見まであった。

街中や観光地で、一人の子供を連れた夫婦を多く見かけた。一人っ子政策の徹底ぶりがうかがわれた。北京は確かに大都会で人が溢れているが、さりとて一人っ子政策をやむを得ないと思わせるものでもない。むしろ現在活気に満ちている北京の街が、やがて老人たちで占められてしまうことへの危惧のほうが先に立ってしまう。日本の高齢化社会はすぐそこに来ているが、それと前後してやって来るであろう中国の高齢化社会を、この国はいったいどのように迎え撃とうとしているのだろうか。少なくとも一人っ子政策は、近い将来廃止ないし緩和されざるを得ないのではないだろうか。

さて、話は変わるが、私は青年招へい事業その他で、外国からのゲストを民泊させた経験はあるが、自らがゲストとして外国の地に民泊するのは初めての経験であった。今回中

国でホームステイするにあたり、私が抱いた数々の不安はそのまま、来日した青年たちが抱く不安と何ら異ならないであろうことを痛感し、この経験は今後彼らを受け入れる際の参考として大いに役立つものであったと思う。

私のホストである林 永寧氏は44歳、天津市天磁公司という国営企業の社長であった。コミュニケーションについては非常に不安で、筆談ででも何とか切り抜けようと覚悟を決めていたが、林氏は思いがけず仕事の上で付き合いのある李 勇氏を通訳に伴って現れた。ホテルには車を雇い迎えに来てくれ、また車の中では始終携帯電話で話すという、いかにも会社重役然とした雰囲気の人物であった。当然予想されることではあるが、中国の一般的家庭とは言えないホストファミリーであると直感した。

意外にも住居は4階建てほどの小さなアパートの2階で、肩書きから想像されるよりははるかにつましいたたずまいの家であった。もちろん2LDKという間取りは、平均的な中国の公務員としてはかなり広いということであった。妻と中学2年生の娘の3人家族であれば十分な広さなのであろう。居間と食堂にテレビが1台ずつ置いてあり、そのほかには台所器具を除いて主な電気製品も見当たらない。個人的にはきわめて質素な生活を好む人のようであった。

その夜は、家族・通訳・運転手を伴ってレストランで夕食をとり、続いて全員でナイトクラブのショーを見に行った。家族揃ってこのようなショーを楽しむ機会がどの程度あるのか不明ではあるが、そこでの熱気や、ショーとショーの間の数分間のダンスタイムで華麗にステップを踏む老若男女の中国人を見るにつけ、中国の改革開放の波を肌で感じる思いであった。少なくともここにいる人々も林家の家族も、ステップも踏めない私よりはずっと洗練された人々に思えたものである。

夜中の12時過ぎに帰宅し、通訳の李氏とも別れ、その瞬間、私はコミュニケーションの手段に窮することを知ったのであった。幸いにも娘の楠（ナン）ちゃんは英語と数学が得意という中学2年生で、彼女のおかげで、今夜はアパートの湯が出ない日なので、もし良ければ近くの浴場へ行きたいという林氏の提案をたいした苦もなく理解することができた。実のところ、北京も天津も空気が乾燥しており、しかもその日の朝はホテルでシャワーを浴びていたので、私はさほど風呂に入りたいとは思っていなかったのだが、遠慮する私を林氏は半ば強引に連れ出したのだった。通りへ出てタクシーを拾い、着いた所はサウナもある公衆浴場。奇しくも中国の公衆浴場を体験することとなってしまった。林氏の気配りには本当に感謝しなくてはならない。広い浴槽に肩までつかることができたのは、冬の中国においてはまさに極楽であった。そこでゆっくりくつろいで、再びアパートに帰って来たのはもう夜中の2時前で、奥さんと娘の楠ちゃんはとっくに休んでいる様子であった。

私の寝室にあてがわれた部屋は林氏夫妻のそれであったらしく、翌朝起きてみると林氏はまだリビングのソファで寝ていた。その時、この家にはゲストルームがないことに気付き、ひどく恐縮してしまった。

8時過ぎ通訳の李氏がやって来て、運転手と4人で、中国式の朝食をとった。どういうわけか、奥さんと娘さんは同席していなかったのだが、これは彼女たちが遠慮していたのか、それとも一般的に中国ではこのような場合、女子供は席をはずすのが伝統なのであろうか。いずれにしても私としては、彼女たちともいろいろ話をしてみたかった。結局、朝食後も彼女たちを残してデパートに連れて行ってもらったりして、親しく話す機会がなかった。

昼は餃子の準備をしてくれており、私にも餃子作りの体験をさせるべく、数枚の皮がまだ残されていた。この細やかな気遣いはうれしかった。この餃子の味は、今までレストランやホテルで味わったのとは違う、本当の家庭の味であると感じた。

林氏は、今回のホームステイの間、正確なスケジュールを立ててくれており、この 24 時間が流れるように過ぎ去っていったという印象である。惜しむらくは家族全員の団欒がなかったということだが、それは、1泊2日という短い時間ではやむを得ないことであったろう。また反省することとして、私自身が良き日本人という印象を彼らに与えることができたかどうか疑問である。ゲストとして彼らの好意に全面的に身を委ねてしまってはいなかったか。今後、日本人とは何かということをもっと考え、常に意識して生きていきたいと思う。

二.「ホストファミリーのホームステイ体験記」　　大瀬 貴生

私が他国の家庭でホームステイ体験をしたのは今回で3回目である。最初は中学1年生の時のアメリカ合衆国。英語を片言しか話せない状況でのホームステイで、中国語のできない私にとっての天津での体験とよく似た状況だった。2度目は青年海外協力隊で派遣されたタイ。そして今回である。3度目とはいえ、ホームステイはやはり緊張する。特に中国では外国人のホームステイは平成6年から始まったばかりと聞けば、緊張はいや増すばかりである。協力隊員時代に未知の場所に一人で冒険した時のような興奮にも似ている。

当初米村さんと一緒に天津の家庭に入る予定だったが、私たちが天津入りしてから全青連の配慮により別々の家庭に入ることになった。

12 月 28 日からホームステイが始まった。他の4人は予定どおり午後からだったが、私は朝からホストファミリーの志 強さんと行動を共にした。それは私のホストファミリーが急遽決まったため、志 強さんの予定に朝から合わせなければならなかったからだ。ホストファーザーの志強さんは天津楊柳青書社の社長で、国家一級美術師であり、他に3つの芸術関係機関の理事や委員を務めている。数年前にシンガポールの前首相リークワンユー氏の夫人が志 強さんの経営する店を訪れている。家族は奥さんと中学生の息子である。

志 強さんの友人の経営する書画店のオープンセレモニーに出席すべく、私たちはホテルを出発した。早く着きすぎたので店の近くを散歩した。テーブルのある所では黙々と筆談し、結構分かり合えるのだが、散歩の途中では筆談するわけにもいかず、「おお」とか「んー」とか幼稚園児のような振る舞いしかできない自分が情けなかった。

予定時刻の 11 時、20 人ほど駆けつけてくれた友人たちの見守るなか、赤ジュータンが敷かれ、映画で見たことのある赤いぼんぼりが飾られ、間もなく爆竹が鳴り出した。始めのうちはパン、パンと日本で鳴らすのと同じ音量だったが、次第に早く、高く鳴り始めた。辺りは爆煙で真っ白になり、音は大型トラックが何十台も一斉にアクセルを踏み込んだ時のような連続音になった。耳を手で塞がずにはいられない状況だが、なぜかうれしくなった。

志 強さんとその友人、総勢9名は大衆向けレストランとしては上等なところで開店を祝い、会食した。この時カラオケも歌われたが、ロシア民謡を中国語で歌う姿を見て、中国＝ロシア＝共産という意識が強く働き、改めて共産主義国家なんだという思いを強くした。だが、待てよ、ここに居る人たちは、私がイメージとして持っている暗い、抑圧された民衆たちとはちと違う。たまに冗談らしいことを言って周りを笑わせているし、男女常に輪

になって食事している。こう思った時、ほんのちょっとだけだが、レンズを通して見るのではない本当の中国が見えた気がする。私はカラオケで「北国の春」を歌い、観客と店のホステスから大きな拍手と花束をいただき、すっかりいい気分になってしまった。

志 強さんの自宅に着いた時、時計の針は6時を回っていた。家族を紹介したあと志 強さんは1時間半ほど外出した。家には親戚の高校生が私とホストファミリーの間の通訳として来ていた。彼は高校3年生で日本語を勉強しているという。名前は郭 雷。雷君と息子のジーモン君とで日本と中国の正月の過ごし方を話し合った。考えてみれば師走の28日といえばおせち料理やら餅つきやらで多忙な時節である。この時期にお邪魔しているのだから、私としては申し訳ない気持ちでいっぱいだ。だが、ここ中国では正月らしさは見受けられない。聞くと、旧暦の正月は盛大に祝うが、新暦は特に何もしないとのこと。この時期に私が訪問しても何の影響もないと教えてくれた。

7時半過ぎ、志 強さんが戻ってきたので5人での食事となった。夕食の後半に餃子が出てきた。しかも優に10人前はあると思われるだけの量が。たれの味はまずまずだったが、中国本場の水餃子を食べることができて満足した。

翌日は志 強さんの職場を見に行き、その後市内の古文化街を見学に行った。通りの店先には麻雀パイ・茶碗・陶磁器・お菓子・太陽電池で動くおもちゃ・スカーフ・印鑑・貝の装飾品などが並んでいる。日本のアメ横を連想させるような通りが1キロほど続いている。ただ、日本で日頃から愛食している天津甘栗が見えない。天津名物だからどこでも手に入るものだと思っていたが、栗屋は見つからない。「本場の天津甘栗を買って帰る」と妻に約束していたのだが、甘栗の入手は半ば諦めた。

昼を少し過ぎた頃、南市食品街に行き、「天津狗不理包子舗」（犬も相手にしない店）という一風変わった名の店で肉まんを食べた。ここで肉まんを食べないと天津に来た意味がないと言われるほど有名な店だそうだ。肉まんを食べながらジーモン君が父親にもたれかかって甘えているのを見て、「子供が1人だとよけいかわいいでしょう」と言うと、「子供は1人なので大事に育てている。この子には家業を継いで芸術家になってほしいと思っている」と語っていた。中学校での美術の成績はトップだと息子自慢をするところは日本人も同じだなと考えた。

ふと、志 強さんは一人っ子政策に対して本音はどう思っているのか聞いてみたいと思った。でも、聞くだけヤボかなと思い、踏みとどまった。今にして思えばもう少し踏み込んだことを聞いておけばよかったと思うことがいくつかある。しかし、いくらホームステイとはいえ一泊。しかも全青連会員なのであまり政治的なことを聞いてはいけないと思い、自ら勝手な基準でブレーキをかけた。10年後でも20年後でも機会があるならエリートでない同水準の人たちと本音で語り合ってみたい。

今回アフターケアーということでたくさんの人たちと知り合うことができた。青年招へい事業で来日した懐かしい顔とも再会できた。これらの人たちやお世話になったホストファミリーと、たとえ細くても永く付き合っていき、本当の朋友（ポンヨウ）になるよう友情を育てていきたいと思う。

なお、昼食後、志 強さんは私を食品売場に連れて行き、「奥さんへのプレゼント」と言って天津甘栗をお土産に買ってくれた。

ホ．「中国雑感」　　米村 幸弘

日本にいた時から十分に調べておけばあんなことはなかったと思う。というのもお土産についてである。北京でも天津でも大きなデパートに行けば何でもあり、地元資本のデパートでもものは十分にある。気持ちとは言え、あまり安いものも良くないのではないか。そこで、あまり高価ではない電気製品（日本製）が良いのではないかと思う。

ホストファミリーの親切には感謝している。家族をはじめ、友人たちの自宅まで行って親切にしてもらった。持って行ったお土産以上にたくさんの土産をもらい、楽しみだった本場の餃子も作らせてもらった。夕食は家庭料理でも量が多く、さすがに食べきれない量だった。餃子も皿に山盛りで出されると食べるのも大変だ。

ただ、ホームステイを受け入れる側からしてもらう側になると、さて、私たちが今までしてきたホームステイはどうだったんだろうか、と考えてしまう。

ホームステイ宅もその友人宅もそうであったが、子供が１人だけである。人口抑制のための一人っ子政策のためだ。都市部や農村部では戸籍に記載されない子供がたくさんいるとも聞いている。その子供らは教育を受ける権利がない反面、一人っ子には都市を中心に日本以上に教育に力を注いでいる。ホームステイ宅でも子供は私立の中学校に通っており、本人も一生懸命勉強している。本人も「大学に行きたい」と言っていたが、現在のところ大学の数が少なく、有名大学に入れるかどうかは分からない、とのことであった。日本の学生よりもよっぽど真剣に勉強しているように見えた。

中華全国青年連合会及び全青連国際部には入国時から出国時までいろいろな面で大変お世話になった。中国国内でのプログラムも十分に組んでもらい、また私たちからのリクエストに対しても柔軟な姿勢で対応し、対処してもらった。心から感謝する。

(3)　提言

イ．問題点

①中国式の宴のやり方が分からず、最初はとまどった。宴のマニュアルはいただいていたが、「大変なことだ」と思うばかりで、かえって緊張が増した。

②北京電視台では帰国青年の徐春梅さんが不在であったため、ＪＩＣＡの機材供与の話はよく聞かされたが、徐さんの仕事ぶりや日本についての報道に変化が生じたかどうかなどについては分からなかった。

③北京と天津という大都市の様子はそれなりに分かったが、大都市ではない地方の生活を見ることができなかった。

ロ．問題点の原因または理由

①だいたいこのような調査団に参加するのは初めての者ばかりなので、宴のやり方どころか表敬訪問をするのも初めてで、大いに戸惑った。歓迎宴の後、ＪＩＣＡの藤本さんにアドバイスをいただいて、２日目からはなんとかなった。

②視察に対応してくれる方があまりに高位についている人なので、大きな組織では訪問の意図が十分に伝わっていないのではないだろうか。「青年招へい事業」の視察ではなく、ＪＩＣＡからの視察と思われていたふしがある。

③中国は広く、移動が困難ということもあるだろうし、地方では外国人の受け入れは難しい面もあるのだろう。

ハ．改善のための具体的方策

①素人向けの調査団マニュアルはできないものだろうか。たとえば、表敬訪問の仕方や宴のすすめ方について。今回いただいた「答礼宴マニュアル」は私たちには難しすぎて、読むだけで「これは無理だ」と思ってしまった。

②北京１６１中学のように私たちが日本で受け入れた青年の職場を訪問先に選んでもらいたい。今回のように青年を受け入れてから何年もたっての訪中だと、青年たちが元の職場にいないことが多くなるので、調査団も受け入れからあまり時間がたたないうちに派遣したほうがよいだろう。

③中国の改革開放政策の進み具合や交通機関の整備を待たないと地方の訪問はできないだろう。また、団員の負担のことも問題となるだろう。将来、青年たちが日本で体験したように、北京と地方の生活を視察できるように努力していただきたい。

ニ．その他

年末にもかかわらずＪＩＣＡ中国事務所にはお世話になった。今回は何も問題はなかったが、３日目以降は全青連に全面的に頼ってしまうのはいかがなものであろうか。ＪＩＣＡのプロジェクトや青年海外協力隊の隊員の職場も訪問したかったので、訪中の時期を変えたほうがいいのかもしれない。

JICA